真名井神社裏包含地発掘調査報告

～三重県志摩郡大王町名田所在～

２００３年3月

三重県埋蔵文化財センター

真名井神社裏包含地発掘調査報告

二〇〇三年三月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県志摩郡大王町には、周知されている遺跡が約60か所あります。このことは、古代から人々が居住し、歴史と文化を築いてきた証拠であります。

今回発掘調査しました真名井神社裏包含地は、海食台地上に所在する遺跡です。すぐ足元には現在の名田漁港を見下ろす位置であり、この遺跡が海と密接に関連のある遺跡であろうと考えられます。今回の調査では、昔の人々が暮らした足跡の一端を知ることができました。

私どもは、これらの貴重な文化財を祖先の残した歴史遺産として保護し、後世に伝えていくと共に、今後の文化の向上と発展の基礎として活用し、公開していかなければなりません。

平成13年度ふるさと農道整備事業に伴い、遺跡の一部が現状変更されることになり、記録保存を図ることになりました。これを契機に、本書が大王町における郷土史研究並びに三重県の古代史研究の一助となるとともに、文化財保護の啓蒙に役立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に当たりましてご協力を賜りました大王町名田の皆様方をはじめ地元の関係者、及び三重県農林水産商工部農業基盤整備課、南勢志摩県民局、大王町教育委員会などの関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成15年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　吉　水　康　夫

例　言

1　本書は、三重県志摩郡大王町名田に所在する真名井神社裏（まないじんじゃうら）包含地の発掘調査報告書である。

2　発掘調査体制は下記の体制で行った。

・調査主体　　三重県教育委員会

・調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

　　調査第一課　技師　萩原義彦

・発掘作業受託　(株)アコード

3　本書の作成は、上記担当者を中心に調査第一課が行った。遺構・遺物の写真撮影や執筆及び全体の編集は萩原義彦が行った。

4　本書作成にあたっては、伊藤裕偉・水橋公恵（斎宮歴史博物館）・山田猛・河北秀美・本堂弘之・大川操・川畑由紀子・山岡奈美恵（三重県埋蔵文化財センター）各氏から御教示・助言を受けた。

5　本書で示す方位は、国土調査法第Ⅵ座標系を基準とし、座標北を用いた。真北は、座標北のＮ０°20′Ｗ、磁北のＮ６°40′Ｗである。

6　本文で示す遺構表示略記号は、下記の通りである。

　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑

7　本書で報告した記録及び出土遺物は、全て三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8　発掘調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産商工部より執行委任を受けて、平成13年度ふるさと農道整備事業（名田地区）に伴って実施した。

9　調査に当っては、三重県農林水産商工部農山漁村振興課・南勢志摩県民局農林水産商工部・大王町教育委員会及び地元各位から協力を得た。

本文目次

Ⅰ　前言 …… 1
　1　調査契機 …… 1
　2　調査体制 …… 1
　3　調査経過 …… 1
　4　調査方法 …… 1
　5　文化財保護法にかかる諸通知 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2
Ⅲ　遺構 …… 7
　1　基本的層位及び地形 …… 7
　2　検出遺構 …… 7
Ⅳ　遺物 …… 10
　1　古墳時代 …… 10
　2　鎌倉時代 …… 10
　3　江戸時代 …… 11
Ⅴ　まとめ …… 14
　1　古墳時代 …… 14
　2　鎌倉時代 …… 14
　3　江戸時代 …… 14

挿図目次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡周辺地形図
第３図　調査区位置図
第４図　遺構平面図
第５図　調査区土層断面図
第６図　ＳＢ９平面・断面図
第７図　出土遺物実測図
第８図　出土遺物実測図

表目次

第１表　遺構一覧表
第２表　出土遺物観察表

写真図版目次

図版１　完掘状況（東南から）
調査区完掘状況（東から）
図版２　ＳＢ９完掘状況（東南から）
ＳＢ９完掘状況（東から）
図版３　出土遺物
図版４　出土遺物
図版５　出土遺物

Ⅰ　前　言

1　調査契機

平成11年度ふるさと農道整備事業（名田地区）予定地は、名田の漁港及び集落から国道260号線の東側を巡る県道61号線磯部大王線に取り付く農道として計画されたものである。現状、集落内を走る道路は、自動車の横幅一台分に満たない道路がほとんどである。この事業地内には、事前照会によって周知の遺跡である真名井神社裏包含地が含まれることが判明した。これを受けて埋蔵文化財保護の目的で2,300㎡の範囲において、試掘調査を平成11年度に実施した。その結果、試掘坑から古墳時代初頭及び鎌倉時代の遺物が出土し、350㎡の本調査が必要となった。そこで、その取り扱いについて農林水産商工部と三重県埋蔵文化財センターで協議を重ねた。しかしながら、現状において遺跡保存が困難であり、発掘調査を実施して記録保存することとなった。

2　調査体制

発掘調査は、平成13年10月25日から開始した。重機による表土掘削は、10月25・26日、作業員による手作業は、10月30日から行った。なお、作業員の管理と資材の提供という作業委託として株式会社アコードに委託した。

発掘調査には、地元の方をはじめ、たくさんの方々に参加していただいた。調査が滞りなく終了できたのもひとえに作業に従事していただき、ご協力の賜物である。ここに御名前を記して感謝したい。

礒崎武雄・坂中勇・中村久郎・浜口長一郎・
早川健太郎・山本禎三・山本実・山際博

3　調査経過

＜調査日誌から＞

平成13年10月25・26日（木・金）　重機による表土掘削。

10月29・30日（月・火）　地区設定及び調査区南・西壁断面図作成。

10月31日（水）　調査第一課会議のため作業中止。

11月１日（木）　作業員投入。遺構検出開始。

11月２日（金）　略図作成及び遺構掘削。

11月５日（月）　ＳＫ等掘削開始。

11月６日（火）　午後から雨のため作業中止。

11月７～９日（水～金）　遺構掘削・包含層掘削。掘立柱建物が存在したとみられることが判明。石垣を崩したことにより調査面積が20㎡拡大した。

11月12日（月）　包含層掘削及び遺構清掃に取りかかる。

11月13日（火）　ほぼ清掃終了。

11月14・15日（水・木）　写真撮影及び実測のため割り付け後、実測。

11月16・19日（金・月）　片付け及び撤収。

4　調査方法

調査における地区割りは、４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。東西方向をアルファベット（西から東にかけてＡ・Ｂ・Ｃ・―）、南北方向を数字（北から南にかけて１・２・３・―）で表示した。遺構掘削は、人力によって行った。また、３ｍ×３ｍの調査区平面図及び調査区土層断面図の実測は、１／20で行った。なお３ｍメッシュ、４ｍメッシュは、座標北に基づいて割り付けを行った。また、遺構番号は包含層及び遺構掘削時において付し、地区別における遺物の取上げは北西隅における地区杭によった。

5　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（県教育長宛）
　平成13年10月５日付農振第406号
・法第58条の２第１項（県教育長宛）
　平成13年10月26日付教埋第226号
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（鳥羽警察署長宛）
　平成14年２月28日付教ス生第８－14号（スポーツ・生涯学習課長通知）

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

真名井神社裏包含地（1）は、三重県大王町名田に所在する遺跡である。大王町は、志摩郡に属し志摩半島から伸びる先志摩半島の根元にあたる部分である。志摩半島は、三重県から東側の太平洋に突き出た形をしている。志摩半島は、海岸線が入り組んでおりリアス式海岸と称される海岸段丘が大きく、海岸に面する平野も狭い。大王町は、行政区分上で南側で熊野灘に、東側で遠州灘に面し、北は阿児町、西は志摩町と接している。また、調査対象地のある名田地区は、大王町の他の畔名・波切・船越の４地区の１つであり、町内の北東に位置し、区域としては他と比較しても狭い。さらに、名田として独立した村名は江戸時代頃とみられるが、地名は古くからあり名田村地誌にもあるように波の荒い海域を灘というがその岸辺の集落であるから名田と変化させて名付けられたとも言われる。

また、名田の海岸線は、太平洋に面しており断崖・浜州とにわかれ、海の難所として知られる大王崎をはじめとした崎角を有した海食台地によって成り立っている。調査対象地の東側にある明神島は、かつて志摩半島と繋がっていたものの海食によって、浅い岩礁が続き離島となっている。

2　歴史的環境

大王町で発掘調査を行う機会は、非常に少ない。そのため、各々の時代の概況は発掘調査による成果から窺えない状況である。よって凡そ志摩半島周辺域で概略をみていきたい。

まず旧石器については、発掘調査による成果がほとんどなく、遺物の表面採集によって知られている遺跡がほとんどである。阿児町では、ナイフ形石器が採集されている松本遺跡①（2）、チャート・サヌカイト製ナイフ形石器・赤色チャート製小型石刃核が採集されている立神ヒゲノ森遺跡群①（3）、大王町では、登茂山遺跡群①（4）・次郎六郎遺跡②（5）・桐垣遺跡①（6）でチャート製小型ナイフ形石器が採集されている。

縄文時代では、前期初頭の貝殻条痕文・刺突文を特徴とする土器が出土している志摩町丸田遺跡①がある。中期には、大差地山（柳谷）遺跡①・阿津里貝塚①がある。後期では、大王町次郎六郎遺跡①・登茂山遺跡群①があり、良好な土器が出土している。また、数少ない発掘調査のなかで次郎六郎東遺跡（7）において、後期の土器が出土している。

弥生時代は、前時代から全体的に退潮気味で遺跡数も少ない。前期土器が出土している鳥羽市答志島所在のおばたけ遺跡③では、後期の遺構も検出されている。また、贄遺跡④においても前期土器が出土している。さらに、若干前期後半の遺物を含むが中期から後期にかけては、白浜遺跡⑤が挙げられよう。発掘調査によって検出された遺構は、竪穴住居がある。遺物では、銅鐸をはじめとして弥生土器、骨角器製品、銅鐸に伴うとみられる石舌など多くのものが出土している。後期の遺跡として指標となるものである。おおよそ弥生時代の遺跡は、入り江の海浜に面した箇所に現状では多いとみられる。今後、発掘調査例によって資料の蓄積が必要であろう。

古墳時代は、かなり重要な古墳が多い。阿児町志島古墳群⑥（8）のおじょか古墳（11号墳）は、とりわけ有名である。この古墳は、1968年に発掘調査が行われている。遺物は、かつてから枕形埴輪などが出土したことが知られており調査によっても方格規矩鏡・珠文鏡・玉類・刀・剣・槍など多くの遺物が出土している。また、横穴式石室の形態は、北九州のものと類似しておりその系譜を引くものであろうと考えられている。

大王町畔名には、前方後円墳が２基所在する。１基は、全長約32mの泊古墳⑦（9）で、泊古墳から五鈴鏡・瑪瑙製丸玉・杏葉・刀などが出土している。もう１基は、全長約30mの鳶ヶ巣古墳１号墳⑦(10)である。

大王町波切には、標高48mの海食台地上に径約20mの円墳である塚原１号墳⑦(11)がある。この古墳は、すでに削平されてしまっているが環状乳画文帯神獣鏡・勾玉・管玉・ガラス小玉が出土している。

第１図　遺跡位置図(１／50,000)　(この地図は、国土地理院発行の「浜島」「磯部」「安乗」「波切」(１／25,000)を掲載したものである)

環状乳画文帯神獣鏡は、埼玉県稲荷山古墳・千葉県大多喜古墳・群馬県観音塚古墳出土の鏡と同型であり、塚原古墳の被葬者像の特殊性を窺わせる。

南勢町宮山古墳⑦は、関西大学によって発掘調査されており、金銅装双竜文環頭太刀・銅椀等を含め、釣針に至る豊かな副葬品が出土している。

記述した以外にも多くの古墳が海食台地上に造営されており、志摩地域ならではの特異な状況である。また、古墳として非常に重要なものが目に付く一方で、集落については不明なことが多く、今後の資料の集積に注意すべきことであろう。

奈良・平安時代については、志摩国の成立が文献上で『日本書紀』持統天皇６年（西暦692年）３月壬午条において「賜所過神郡及伊賀伊勢志摩國造等冠位」とみられ、この時期には成立していたとみられる。この時期の発掘調査例は少なく、やや不明瞭と言わざるをえない。志摩国府跡や志摩国分寺の所在地についても未詳である。しかし、阿児町国府一帯が可能性のもっとも高い地域とみられる。また、御食国としての役割は、磯部町飯浜貝塚⑦・鳥羽市贄遺跡によって窺える。飯浜貝塚では、奈良・平安時代の製塩遺構とともに製塩土器や和同開珎が出土している。贄遺跡でも奈良・平安時代の製塩遺構が確認されており、遺物においても和同開珎・神功開宝・隆平永宝・金銅製巡方・丸鞆・鉸具・蛇尾等の帯金具や「美濃」銘刻印の須恵器が出土しており、中央政府との特殊な繋がりをもつ遺跡であろうことが推測される。さらに、平城宮出土の木簡にも志摩国の調として各種の海産物に関する記載があり、この地域の特性を強くあらわしている。

鎌倉・室町時代にかけては、阿児町殿畑⑧(12)・西殿⑨(13)・天神⑩(14)・東海道遺跡⑪(15)・磯部町小海遺跡⑫が発掘調査されている。殿畑遺跡では、およそ３時期に分けられ、掘立柱建物等が検出されている。天神遺跡では、殿畑遺跡と同一の集落跡と考えられ、掘立柱建物等が検出されている。西殿遺跡では人骨が多く出土しており、墓域的な要素を持つ遺跡とみられる。東海道遺跡では溝や土坑が確認されており、何らかの生産活動の域であろうとみられる。

小海遺跡では、鎌倉時代末頃から室町時代にかけての製塩遺構が検出されている。志摩半島全域の各地にこうした生産遺跡が所在したとみられる。

室町時代末から江戸時代にかけては、九鬼氏の飛躍の目覚しい時期である。波切に根ざした九鬼氏は、徐々に志摩全域を支配下におき、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の時代を水軍の雄として生き抜き、鳥羽藩の大名として残る。後には、三田（兵庫県三田市）と綾部（京都府綾部市）に移封されている。

近世においては、この地域は鳥羽藩領であり、稲作には不向きだが海産物には恵まれており、とりわけ鮑・栄螺・海胆・天草・若布・荒布・搗布などが多く産出しており、現在でも海女による潜水漁法が行われている。

［註］

●旧石器・縄文時代に関しては、下記の文献に拠った。

①田村陽一『佐々木武門考古資料図録』（大王町教育委員会　1994年）

②小林秀「次郎六郎東遺跡」（三重県埋蔵文化財センター　1996年）

③下村登良男・村上喜雄「おばたけ遺跡発掘調査報告」（鳥羽市教育委員会　1972年）

④松本茂一他「贄遺跡」（鳥羽市教育委員会　1975年）

松本茂一他「贄遺跡　－第２次発掘調査報告－」（鳥羽市教育委員会　1987年）

⑤「白浜遺跡」（本浦遺跡発掘調査団　1990年）

⑥小玉道明・下村登良男・村上喜雄「志摩・おじょか古墳発掘調査概要」（阿児町教育委員会　1968年）

●古墳時代以降に関しては、下記の文献に拠った。

⑦「紀伊半島の文化史的研究　－考古学編－」（関西大学文学部考古学研究室　第６冊　1992年）

⑧新田洋・浦谷廣己「殿畑遺跡発掘調査報告」（三重県教育委員会　1980年）

⑨齋藤直樹「西殿遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター　1992年）

⑩中村信裕・伊藤久嗣「天神遺跡発掘調査報告」（三重県教育委員会　1984年）

⑪伊藤裕偉「東海道遺跡発掘調査報告」（三重県教

第２図　遺跡周辺地形図（１／5,000）

育委員会　1989年）
佐藤公・西村美幸「東海道遺跡（第２次）発掘調
査報告」（三重県埋蔵文化財センター　1997年）
⑫近藤義郎「小海」（磯部町教育委員会　1976年）

第３図　調査区位置図（１／1,000）

Ⅲ　遺　構

1　基本的層序及び地形

今回の調査地は、標高18m前後の海食台地上に立地する包含地である。調査区は、西から北側にかけて屈曲する尾根上のやや平坦地である。現況は畑地であるが、棚田に似たように石やコンクリートによって作られた段々畑の一角である。調査区北側は段々になっているものの、北側へかなり強く傾斜する斜面で、南側は名田の集落でかなりの急傾斜である。東側は真名井神社に続く尾根に連なり下っており、西側はやや登り気味に連なる尾根と急傾斜になっている箇所もある。

基本的な層序は、第１層が黒褐色砂質土、第２層が暗赤褐色土、第３層が橙色土、第４層が明赤褐色土である。第１層は、畑の耕作土であろう。第２層及び第３層は、尾根斜面を削り平坦にする過程に生じた盛り土とみられる。遺構検出は、第４層上において行い、中世及び近世の遺構を確認することができた。また、西側に傾斜する斜面の自然堆積層の下層において古墳時代の遺物を、上層では中世の遺物を多く確認することができた。さらに、表土上において中世から近世の多くの遺物が確認でき、遺構等の削平が著しいことが予想されていた。さらに、調査によって畑のために造作された石垣を取り払うことによって調査面積が増えた。

2　検出遺構

今回の調査によって判明した遺構には、掘立柱建物及び土坑がある。おおまかにみて中世及び近世とみられる。主な遺構については、次に記述する。また、個別の詳細なデータは遺構一覧表において記載しており、参照されたい（第１表　遺構一覧表）。

1）鎌倉時代

ＳＢ９　調査区北側のやや平坦な部分において検出した掘立柱建物である。掘立柱建物は、桁行４間・梁行４間の総柱建物である。建物方向は北で西に17度振れている。柱穴は、最も大きいもので径約0.3m、最も深いもので約0.3mを測る。柱穴の埋土は、近世の土坑の埋土と比較して土質・土色ともに異なること、ＳＫ４と柱穴の重複関係からこの掘立柱建物は、この時期の掘立柱建物と考えてよかろう。

建物の規模は、桁行が8.3～8.5m、梁行が８～8.2mを測る。柱間寸法は、桁行が７尺６寸・６尺６寸・６尺６寸・６尺６寸で梁行５尺６寸・７尺６寸・６尺６寸・６尺６寸と推定され、建物全体の推定復元は、桁行が8.3m（27尺４寸）、梁行が7.99m（26尺４寸）とみられる。掘立柱建物の東桁南側に１間×１間の施設が付設されている。出入口と推定できそうであるが明確でない。

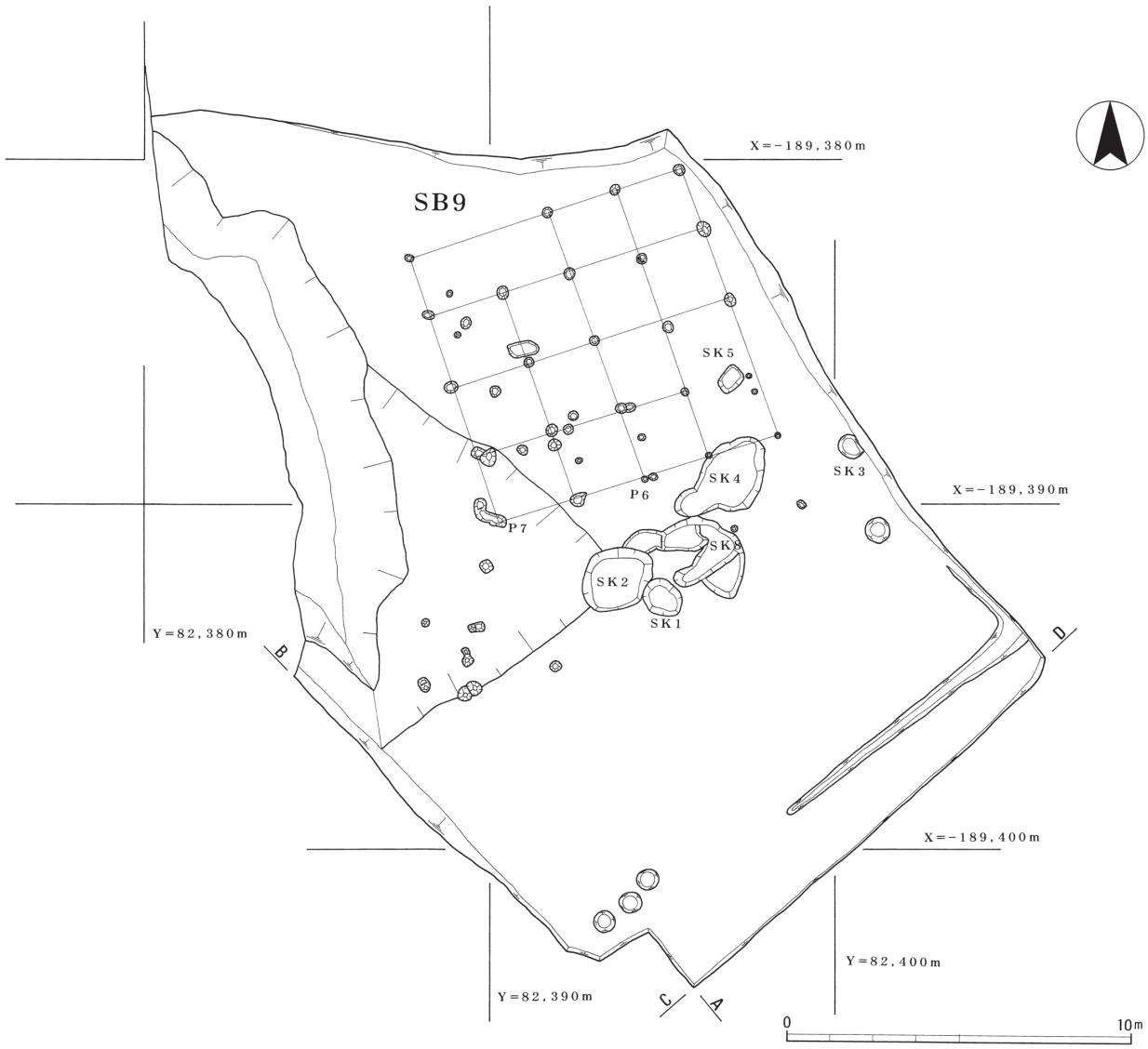
遺物には陶器椀片や土錘があり、13世紀代とみられる。

2）江戸時代

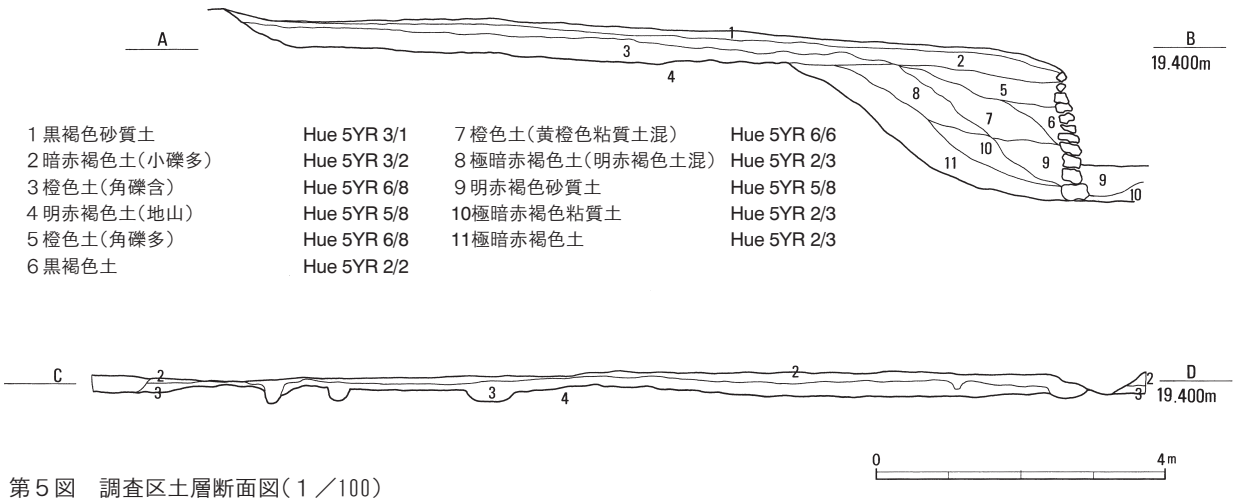
ＳＫ１　調査区中央部において検出した土坑である。土坑の平面は楕円形で、検出規模は長径1.24m、短径１m、深さ0.31mである。遺物は、土師器小皿・焙烙が出土している。時期は、18世紀末から19世紀初頭とみられる。

ＳＫ２　調査区中央部ＳＫ１に隣接して検出した土坑である。土坑の平面形は楕円形で、検出規模は長径2.26m、短径1.82m、深さ0.37mである。遺物は、土師器小皿が出土している。時期は、18～19世紀代であろう。

ＳＫ４　調査区中央部やや東側において検出した土坑である。平面形は、不整形である。検出規模は、長径3.1m、短径1.76m、深さ0.18mである。土坑西側のやや張り出した部分は、他の遺構との重複の可能性もある。遺物は、陶器椀・磁器皿が出土している。時期は、18世紀後葉とみられる。

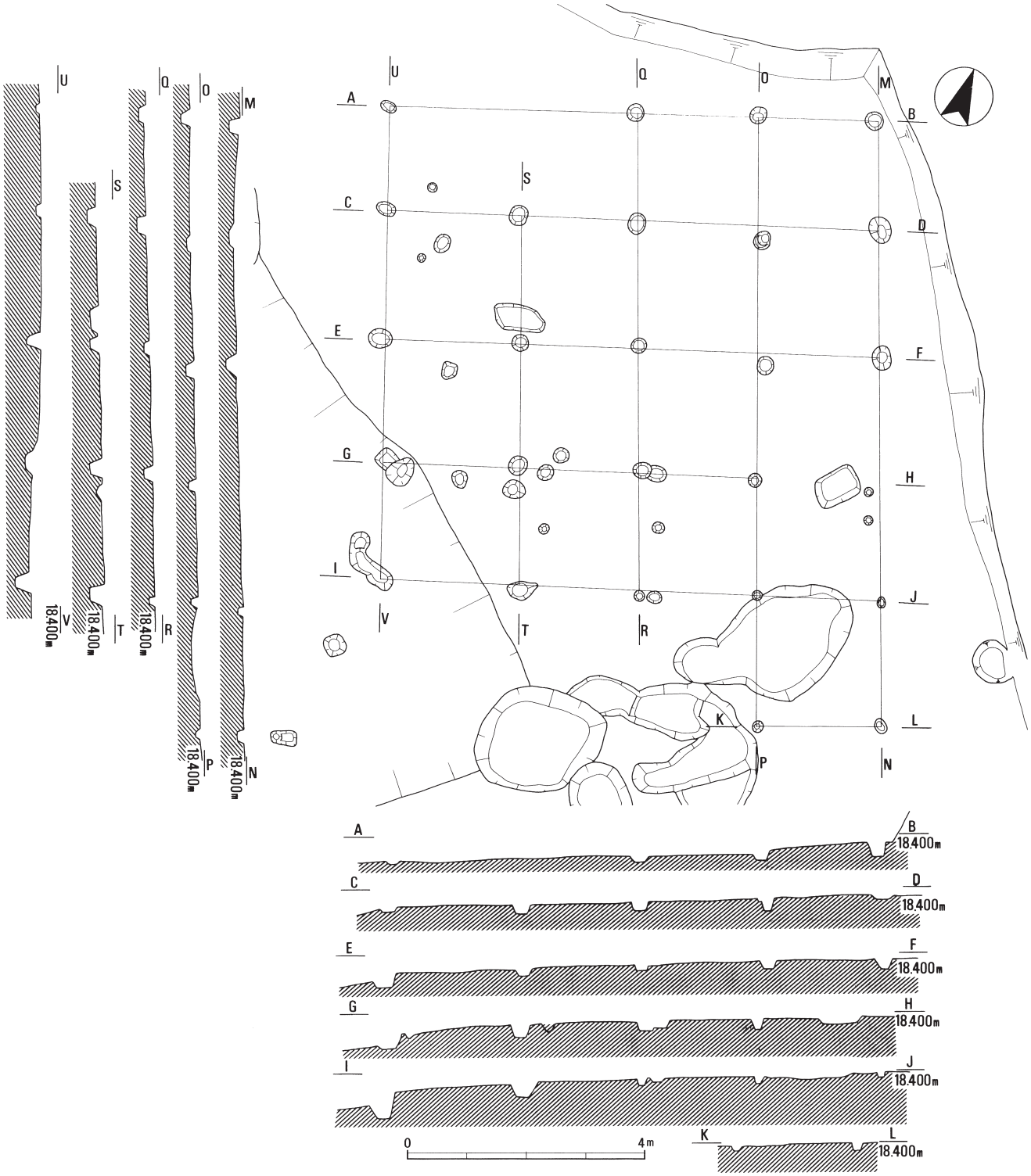


第４図　遺構平面図(１／200)



１黒褐色砂質土	Hue 5YR 3/1	７橙色土(黄橙色粘質土混)	Hue 5YR 6/6
２暗赤褐色土(小礫多)	Hue 5YR 3/2	８極暗赤褐色土(明赤褐色土混)	Hue 5YR 2/3
３橙色土(角礫含)	Hue 5YR 6/8	９明赤褐色砂質土	Hue 5YR 5/8
４明赤褐色土(地山)	Hue 5YR 5/8	10極暗赤褐色粘質土	Hue 5YR 2/3
５橙色土(角礫多)	Hue 5YR 6/8	11極暗赤褐色土	Hue 5YR 2/3
６黒褐色土	Hue 5YR 2/2		

第５図　調査区土層断面図(１／100)



第６図　ＳＢ９平面･断面図（１／１００）

遺構番号	遺構名	地区名	形　状	規　模	時　期	備　考
ＳＫ１	土坑	Ｄ５	楕円形	長径1.24m×短径１m×深さ0.31m	江戸時代	
ＳＫ２	土坑	Ｄ５	楕円形	長径2.26m×短径1.82m×深さ0.37m	江戸時代	
ＳＫ３	土坑	Ｅ３	楕円形	長径0.72m×短径0.56m×深さ0.13m	不　明	
ＳＫ４	土坑	Ｅ４	不整形	長径3.1m×短径1.76m×深さ0.18m	江戸時代	
ＳＫ５	土坑	Ｆ４	隅丸方形	長径0.76m×短径0.56m×深さ0.06m	不　明	
Ｐ６	柱穴	Ｅ５	円形	径0.16m×深さ0.11m	鎌倉時代	
Ｐ７	柱穴	Ｅ６	円形	長径0.44m×短径0.32m×深さ0.27m	鎌倉時代	
ＳＫ８	土坑	Ｅ４	不整形	長径2.16m×短径0.78m×深さ0.2m	不　明	
ＳＢ９	掘立柱建物	Ｅ６他		４間×４間	鎌倉時代	

第１表　遺構一覧表

Ⅳ　遺　物

今回の調査によって出土した遺物は、コンテナバットにして10箱である。遺物の時期は、おおまかに古墳時代、鎌倉時代、江戸時代にかけてのものである。遺物は、ほとんどが土器であり土製品・金属製品などを含む。主なものについて記述するが、詳細なデータは、出土遺物観察表を参照されたい。

1　古墳時代

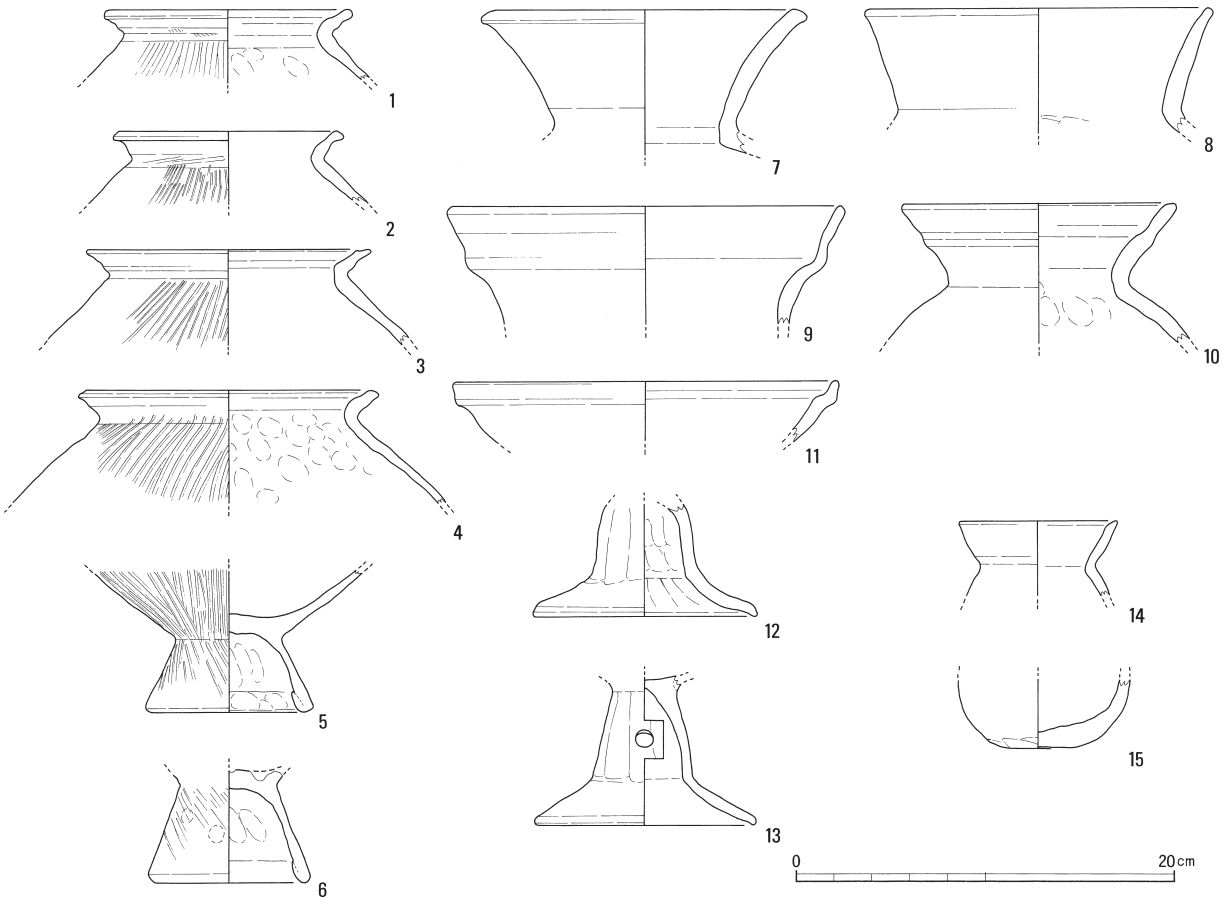
1）包含層出土遺物（1～15）

全体的に遺物の遺存状況は、良好と言えない。1～6はS字状口縁台付甕である。1～4は口縁部から体部にかけてのもので、5・6は脚台部分である。5・6の脚台内面の折り返しは大きい。4と5は、同一個体の可能性が強い。1～6は、S字状口縁台付甕のD類に相当しよう。7・8は壺である。8は、やや直気味に立ちあがる口辺部である。共にやや風化著しく調整不明な部分が多い。9・10は複合口縁壺である。両方とも風化が著しく、調整不明瞭である。擬口縁かどうか判断し難い。11は、小型有段鉢か高杯の口縁部であろう。口縁部に短いながらも段をもち、弱く外反しながら立ちあがる。立ち上がりは短い。12･13は高杯の脚部である。14・15は小形丸底壺である。両方とも口縁部最大径は体部径とほぼ同じ位であろう。15は、底部外面はケズリによって調整される。遺物の時期は、全て古墳時代前期とみられる。

2　鎌倉時代

1）ＳＢ９出土遺物（37）

土錘が１点出土している。



第７図　出土遺物実測図

２）包含層出土遺物（16～36）

ほとんどの遺物が陶器（山茶椀・山皿）椀・皿によってしめられ、一部表採のものも含む。陶器類は、藤澤編年の第４～６型式の範疇に納まる。陶器椀・皿は、大まかに12世紀中葉から13世紀中葉にかけてのものである。22・25は渥美で、他は尾張とみられる。33は白磁椀の口縁部である。34は白磁皿。博多分類Ⅳ類であり、12世紀末から13世紀初頭にかけてのものである。35・36は、土錘で、36は短い。

３　江戸時代

１）ＳＫ１出土遺物（38～40）

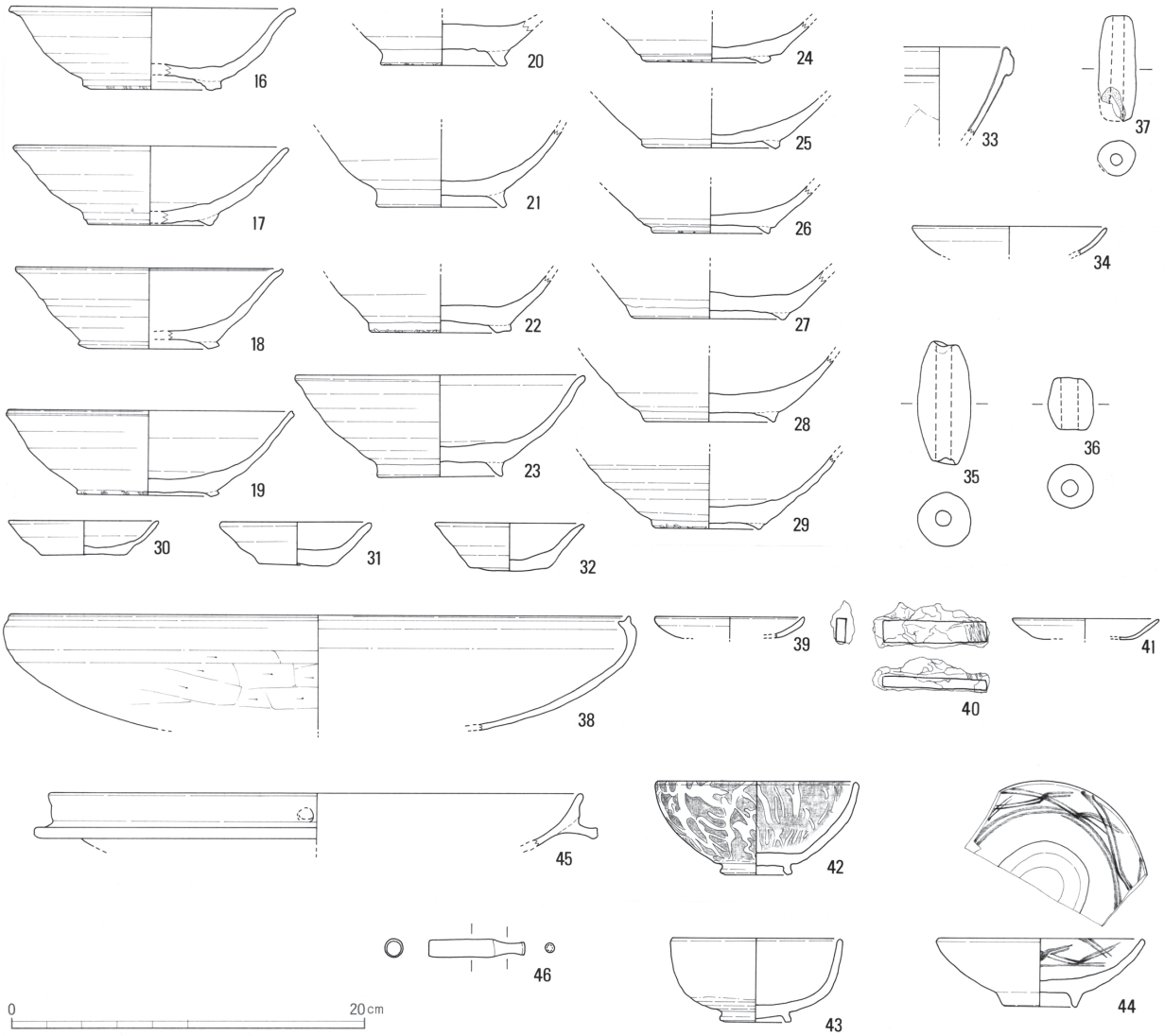
土師器焙烙・小皿が出土している。38は、西三河地方の焙烙である。全体的に黒く煤けている。口縁部は内外面が横ナデで、体部外面は横方向のケズリによって調整される。体部内面は、ハケであろうか煤けてしまっており不明瞭である。金子氏の分類では、Ｊ類であろう。40の金属製品は、一部に木質の痕跡をとどめる。建築部材に伴う金具であろうか。遺物の時期は､18世紀末から19世紀初頭とみられる。

２）ＳＫ２出土遺物（41）

土師器小皿が出土している。器壁は、薄く緩やかに底部から立ちあがる。

３）ＳＫ４出土遺物（42～44）

42・43は、陶器椀で共に瀬戸・美濃である。高台部の成形は、非常に似ている。42は白泥が掛けられ、釉は透明である。43は、鉄釉が掛けられている。44は、磁器皿である。波佐見のもので見込みの一部は、



第８図　出土遺物実測図

拭取られ砂を挟んで積み重ねて焼かれた痕跡を残す。18世紀後半以降のものである。

４）包含層出土遺物（45～46）

45は、瓦質の焙烙である。雲出川北岸から北側においてみられるものである。概ね18世紀後半から19世紀初頭にかけてのものであろう。46は、煙管の吸口である。

［参考文献］

・古式土師器について

伊藤裕偉・川崎志乃「雲出島貫遺跡の古式土師器」（『嶋抜』第１次調査　三重県埋蔵文化財センター　1998年）

伊藤裕偉・川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」（『嶋抜Ⅲ』　三重県埋蔵文化財センター　2001年）

山田猛ほか『山城・北瀬古遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1994年）

赤塚次郎『廻間遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター　1990年）

・陶器類について

藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994年）

山本信夫「土器の分類」（『太宰府条坊跡』Ⅱ　太宰府市教育委員会　1983年）

・焙烙及び陶磁器類について

金子健一「尾張・三河地方のホウロク」（『鍋と甕そのデザイン』　第４回東海考古学フォーラム　1996年）

伊藤裕偉「嶋抜Ⅱ」（三重県埋蔵文化財センター　2000年）

伊藤裕偉「安濃津に関する基礎検討」（『安濃津』三重県埋蔵文化財センター　1997年）

本堂弘之「六大Ｂ遺跡（Ａ地区）発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター　1999年）

遺物については、御助言を頂いたが書ききれていない部分が多くあろう。全て筆者の責である。

［遺物観察表註］

報告書に掲載した遺物の観察表は、以下の規則によって作成した。

1　観察表左端の番号は、各遺物実測図の番号に対応する。これは器種・材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には、番号を付していない。したがってこの番号が遺物の全てでない。

2　実測番号は、実測を行った際の番号である。出だしの３桁は用紙の番号で、後側の２桁は用紙内での実測した順序の番号である。

3　出土遺構は上段に地区番号を表し、下段に遺構番号を示している。地区・遺構番号は、遺構平面図及び遺構一覧表を参考にされたい。

4　器種については、判明しているものについて記載した。

5　計測値について記載した口径・器高・その他は、それぞれ最大値をとっている。また、「－」は、計測できないものを表している。単位は、記載のとおりcmである。さらに遺物によっては、長・幅・厚・重・高台径・底径・つまみ径などを表すこともある。

6　調整技法の特徴については、あくまでも成されている調整について記述しており調整順序によるものでない。

7　胎土については、粗密を記し、括弧内に小石・砂粒の有無や大小について記述する。

8　焼成については、良・並・不良の３段階に分けて、その中間に位置する場合はややを付記している。

9　色調については、『新版　標準土色帖』（小山・竹原編19版　1997年）に基づいて表記した。

10　残存については、遺物の残りの割合で表記している。「－」は、表しきれないものである。

11　備考は、その遺物における特徴的な事柄を記載しているか、遺物取り上げの際の番号などを表記している。

No.	登録番号	器　種	出土遺構	計　測　値			調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
				口径（cm）	器高（cm）	その他（cm）						
1	008-03	古式土師器 S字状口縁台付甕	C６ 包含層	13.1	残高 3.5	—	内：オサエ、ナデ、ヨコナデ 外：ナデ、ヨコナデ、ハケ	やや粗（～２㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色　灰黄褐色 10ＹＲ6／3　10ＹＲ5／2～4／2	口縁部 約10%	
2	005-04	古式土師器 S字状口縁台付甕	D４ 包含層	12.2	残高 3.8	—	内：ナデ、ヨコナデ 外：ヨコナデ、ハケ	やや粗（～2.5㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色　にぶい黄橙色 10ＹＲ7／3　10ＹＲ6／3	口縁部 約20%	
3	005-03	古式土師器 S字状口縁台付甕	C６ 包含層	15	残高 4.6	—	内：ナデ、ヨコナデ 外：ヨコナデ、ハケ	粗（～2.5㎜の小石を含む）	並	にぶい橙色　黒褐色 7.5ＹＲ6／4　10ＹＲ3／1	口縁部 約20%	
4･5	008-02	古式土師器 S字状口縁台付甕	試掘坑 №３	15.9	—	台底径 8.8	内：オサエ、ナデ、ヨコナデ 外：ナデ、ヨコナデ、ハケ	粗（～３㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色　にぶい褐色 にぶい黄橙色 10ＹＲ7／3　7.5ＹＲ6／3 10ＹＲ6／3	約10%	
6	004-06	古式土師器 台付甕	C４ 包含層	—	残高 6.0	底径 8.6	内：ナデ、オサエ、ヨコナデ 外：ヨコナデ、ハケ	やや粗（～3.5㎜の小石を含む）	良	橙色　にぶい橙色 2.5ＹＲ6／6　7.5ＹＲ7／4	台部完形	
7	006-01	古式土師器 壺	C６ 包含層	17.2	残高 6.4	—	内：ナデ 外：ナデ	やや粗（～3.2㎜の砂粒を含む）	並	明赤褐色 5ＹＲ5／6	微量	
8	006-03	古式土師器 壺	C４ 包含層	18.4	残高 5.9	—	内：工具ナデ？ 外：ナデ	やや粗（～1.8㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色　灰黄褐色 断面：褐灰色 10ＹＲ7／4　10ＹＲ5／2 10ＹＲ4／1	微量	
9	006-02	古式土師器 二重口縁壺	C６ 包含層	21.1	残高 6.2	—	風化著しく調整不明	粗（～3.5㎜の小石を含む）	並	浅黄橙色　橙色 7.5ＹＲ8／6　7.5ＹＲ7／6	微量	
10	005-02	古式土師器 二重口縁壺	C６ 包含層	14.6	残高 7.1	—	内：ナデ、オサエ、ヨコナデ 外：ヨコナデ、ナデ	やや密（～3.5㎜の小石を含む）	並	浅黄橙色　にぶい黄橙色 断面：黄灰色 7.5ＹＲ8／4　10ＹＲ7／4 10ＹＲ5／1	口縁部 約20%	
11	005-07	古式土師器 鉢？高杯？	C６ 包含層	20.4	残高 3.2	—	内：ナデ 外：ナデ	粗（～2.5㎜の砂粒を含む）	並	にぶい橙色　にぶい褐色 黒褐色 7.5ＹＲ6／4　7.5ＹＲ5／4 2.5Y3／1	微量	
12	007-04	古式土師器 高杯	C６ 包含層	—	残高 5.9	底径 11.8	内：工具ナデ、ヨコナデ 外：オサエ、ヨコナデ	やや粗（～２㎜の砂粒を含む）	並	にぶい橙色　明褐色 7.5ＹＲ6／4　7.5ＹＲ5／6	脚部 約40%	
13	007-05	古式土師器 高杯	C６ 包含層	—	残高 7.5	底径 11.7	内：工具ナデ、ヨコナデ 外：オサエ、ヨコナデ	やや粗（～1.5㎜の砂粒を含む）	並	にぶい橙色 7.5ＹＲ6／4	脚部 約20%	
14	007-03	古式土師器 小型丸底壺	試掘坑 №３	8.3	残高 4.0	—	内：オサエ、ナデ、ヨコナデ 外：ナデ、ヨコナデ、オサエ	やや密（～３㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色 10ＹＲ6／4	約10%	
15	004-05	古式土師器 小型丸底壺	試掘坑 №３	—	残高 3.6	—	内：ナデ 外：ナデ、体部下半ケズリ、底部ナデ	やや密（～1.8㎜の砂粒を含む）	並	明赤褐色　橙色 2.5ＹＲ5／6　5ＹＲ6／6	約20%	
16	004-03	陶器椀 （山茶椀）	B５ 包含層	16.2	4.5	高台径 7.8	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	粗（～4.2㎜の砂粒を含む）	良	灰白色 5Y7／1	約30%	
17	004-04	陶器椀 （山茶椀）	C４ 包含層	15.6	4.4	高台径 7.0	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや粗（～3.5㎜の小石を含む）	良	灰白色 2.5Y8／1	約30%	
18	002-01	陶器椀 （山茶椀）	C５ 包含層	15.2	4.5	高台径 8.0	内：ロクロナデ、重ね焼きの痕跡残る 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや粗（～2.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色 5Y7／1,7／2	約30%	
19	004-01	陶器椀 （山茶椀）	C５ 包含層	16.3	4.7	高台径 8.0	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰黄色 2.5Y7／2	完形	
20	001-06	陶器椀 （山茶椀）	C５ 包含層	—	残高 2.5	高台径 7.1	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや粗（～2.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色 5Y8／1	約10%	
21	002-03	陶器椀 （山茶椀）	C６ 包含層	—	残高 4.3	高台径 7.3	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色 7.5Y7／1	約20%	
22	001-04	陶器椀 （山茶椀）	C５ 包含層	—	残高 3.3	高台径 8.0	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ	やや密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	にぶい黄色 2.5Y6／3	約20%	
23	007-01	陶器椀 （山茶椀）	試掘坑 №３	16.4	5.7	高台径 7.1～7.8	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや密（～１㎜の砂粒を含む）	良	灰黄色 2.5Y7／2	約40%	
24	001-07	陶器椀 （山茶椀）	C５ 包含層	—	残高 2.3	高台径 7.1～7.8	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや粗（～2.0㎜の砂粒を含む）	良	灰黄色 2.5Y7／2	約10%	
25	007-02	陶器椀 （山茶椀）	B５ 包含層	—	残高 2.6	高台径 7.8	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや密（～２㎜の砂粒を含む）	良	浅黄色 2.5Y7／3	約10%	
26	002-06	陶器椀 （山茶椀）	表採	—	残高 2.7	高台径 6.7	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや密（～2.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色 5Y7／1	約10%	
27	004-02	陶器椀 （山茶椀）	B５ 包含層	—	残高 2.7	高台径 8.7	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや粗（～6.5㎜の砂粒を含む）	良	灰黄色 2.5Y7／2	約10%	
28	002-05	陶器椀 （山茶椀）	表採	—	残高 3.7	高台径 7.4	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや密（～3.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色 2.5Y8／2	約20%	
29	001-05	陶器椀 （山茶椀）	C５ 包含層	—	残高 4.2	高台径 6.1	内：ロクロナデ 外：体部外面ロクロナデ、高台部貼り付け後ナデ、底部ナデ,糸切り痕跡残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色 7.5Y7／1	約20%	
30	005-06	陶器皿 （山皿）	C５ 包含層	9.2	1.9	底径 4.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、底部糸切り痕跡残る	やや密（～２㎜の砂粒を含む）	良	灰白色 2.5Y7／1,8／1	約30%	
31	005-05	陶器皿 （山皿）	C５ 包含層	8.6	2.4	底径 4.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、底部糸切り痕跡残る	やや密（～２㎜の砂粒を含む）	並	灰白色 2.5Y8／1	約70%	
32	002-02	陶器皿 （山皿）	C５ 包含層	8.4	2.6	底径 4.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、底部糸切り痕跡残る	やや密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰黄色 2.5Y7／2	約50%	
33	006-05	磁器椀（白磁）	C３ 包含層	—	残高 4.7	—		密	良	灰白色 5Y7／2,8／1	微量	
34	006-04	磁器皿（白磁）	C６ 包含層	11	残高 1.6	—		密	良	灰白色 7.5Y7／2	約10%	
35	003-02	土錘	C５ 包含層	長さ 6.9	幅 3.0	重さ 54.25ｇ	—	やや粗（～1.5㎜の砂粒を含む）	並	橙色　にぶい赤褐色 2.5Y6／6　5ＹＲ5／3	完形	
36	003-03	土錘	表採	長さ 2.9	幅 2.6	重さ 14.33ｇ	—	密（微砂粒を含む）	並	橙色　明赤褐色 5ＹＲ6／6　5ＹＲ5／6	完形	
37	003-01	土錘	D３ P６	長さ 5.9	幅 2.1	重さ 20.12ｇ	—	やや粗（～1.5㎜の砂粒を含む）	並	浅黄橙色 10ＹＲ8／3	約90%	
38	008-01	土師器 焙烙	D５ SK１	35.2	残高 6.4	—	内：ナデ、ヨコナデ 外：オサエ、ケズリ、ナデ	密（～３㎜の砂粒を含む）	並	黒褐色 7.5ＹＲ3／2，2／2	約30%	
39	002-04	土師器 小皿	D５ SK１	8.4	残高 1.2	—	内：ヨコナデ 外：オサエ、ナデ	やや密（～1.0㎜の砂粒を含む）	並	橙色 5ＹＲ6／6	約20%	
40	003-04	金属製品　金具	D５ SK１	—	—	—	—	—	—	—	—	
41	007-06	土師器 小皿	D５ SK２	8.2	1.15	—	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	密（微砂粒を含む）	並	にぶい橙色 7.5ＹＲ7／4	約20%	
42	001-01	陶器椀	E４ SK４	11.4	5.2	高台径 4.1	内外面：ロクロナデ、高台部削り出し、透明釉	密（～2.0㎜の砂粒を含む）	良好	淡黄色 2.5Y8／3	約70%	釉薬：灰オリーブ色 5Y6／2,5／2
43	001-03	陶器椀	E４ SK４	9.6	4.7	高台径 4.0	内外面：ロクロナデ、高台部削り出し、鉄釉	密（微砂粒を含む）	良好	淡黄色 2.5Y8／3	約50%	釉薬：褐色 7.5ＹＲ4／3
44	001-02	磁器皿	E４ SK４	11.7	3.8	高台径 4.2	内外面：ロクロナデ、高台部削り出し、砂積み	密（微砂粒を含む）	良好	灰白色 N8／0	約50%	釉薬：灰白色 2.5G8／1,N7／0
45	005-01	瓦質　焙烙	C４ 包含層	30.2	残高 3.7	—	内：ナデ 外：貼り付け後ナデ、ナデ	やや密（～1.5㎜の微砂粒を含む）	並	黒色　断面：浅黄橙色 10ＹＲ2／1　10ＹＲ8／4	微量	一穴有り
46	003-05	煙管　吸口	C６ 包含層	—	—	—	—	—	—	—	—	

第２表　出土遺物観察表

Ⅴ　まとめ

志摩地域において発掘調査を行う機会が少なく、調査自体に大きな意味があった。特に今回は、調査区が小さいながらも鎌倉時代と判断できそうな掘立柱建物の遺構の検出ができた。また、遺物も包含層出土のものがほとんどを占めるものの、かなり良好なものも含む。以下に、これらの成果を基に考えたい。

1　古墳時代

調査区内において遺物は、出土しているが遺構に伴うものがない。しかし、遺物出土量からみて集落があったことは疑いの余地はなかろう。

また、調査地から北方約１㎞において鳶ヶ巣古墳や泊古墳、約２㎞において志島古墳群があり、周辺域の島嶼の先端部に点々と古墳が築造されている。それらの被葬者及び造営者の集落については、調査例がなく不明なことが多い。しかし、海岸域だけでなく当地のような台地尾根上においても集落が存在したことは、大きな意味を含み、今後は、海岸域だけでなく海食台地尾根上にも注意を払う必要があろう。ところで台地上においても集落が存在したということはいかなる理由であろうか。

2　鎌倉時代

検出した柱穴から、掘立柱建物１棟が判明した。阿児町殿畑遺跡や西殿遺跡においても掘立柱建物が検出されており、集落跡とみて差し支えないであろう。過去の調査例からみても海岸域に終始しており、台地上での検出例がなく掘立柱建物の有様を推測するのは、難しい。しかし、掘立柱建物が建てられた場所は、名田の海浜部に直に面した所でなく、やや奥まり海や山からの風雨に耐えやすい場所に建てられている。また、僅かに離れると海上の非常に見通しの良い場所に至る。

推測の域をでないがこの時代では、海を利用した環境から離れられなかったであろうことが窺える一方、海上を見張る役割を担っていた建物かもしれない。

3　江戸時代

ＳＫ１から西三河地方において生産された土師器の焙烙（38）が出土している。一方では、包含層から北伊勢地域において生産されたとみられる瓦質の焙烙（45）が出土している。同一遺構からでないことが残念であるが、遺物の時期は、共に18世紀末から19世紀初頭とみられ、この両者が揃って出土していることは、非常に意味のあることである。このような現象は、南伊勢系土師器鍋がないことと共に、この地域の流通のあり方を窺わせる。もちろん、今回の１例だけで志摩地域全域における18世紀末から19世紀初頭に及ぶ煮沸具の流通の様相を即断することはできない。今後は、資料の増加を待ちながら、この時代の流通状況をみていきたい。

完掘状況（東南から）

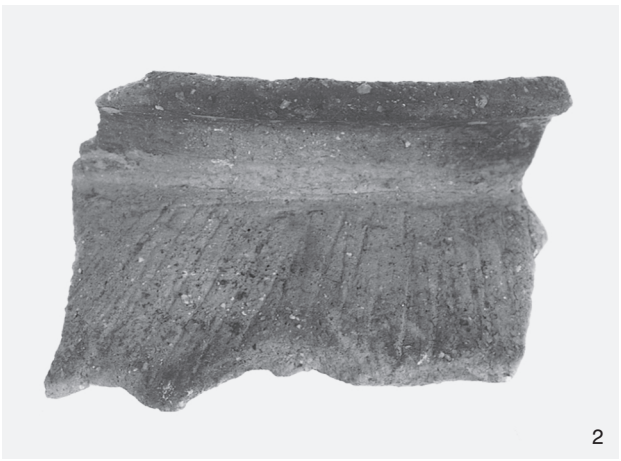
完掘状況（東から）

ＰＬ２

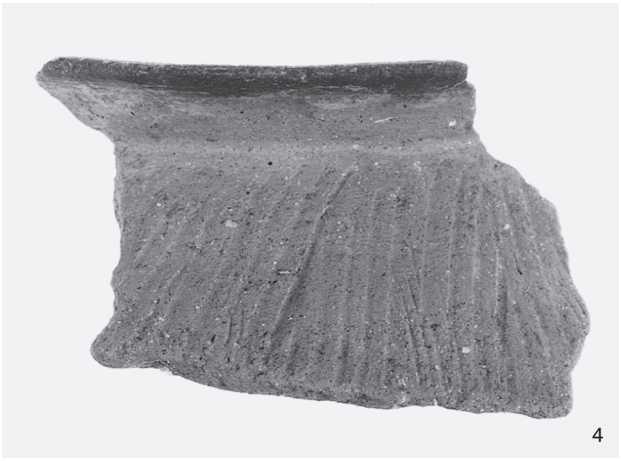
ＳＢ９完掘状況（東南から）

ＳＢ９完掘状況（東から）

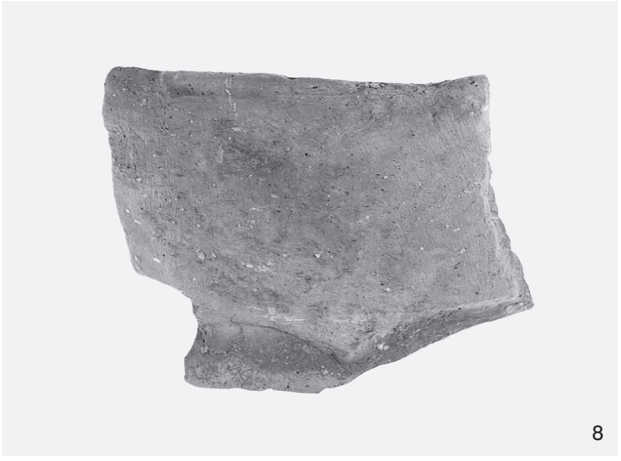
1


2

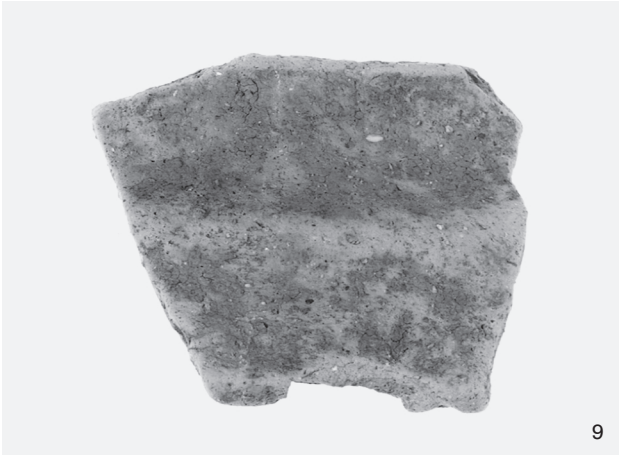
3


4

5


8

6


9

出土遺物

ＰＬ４

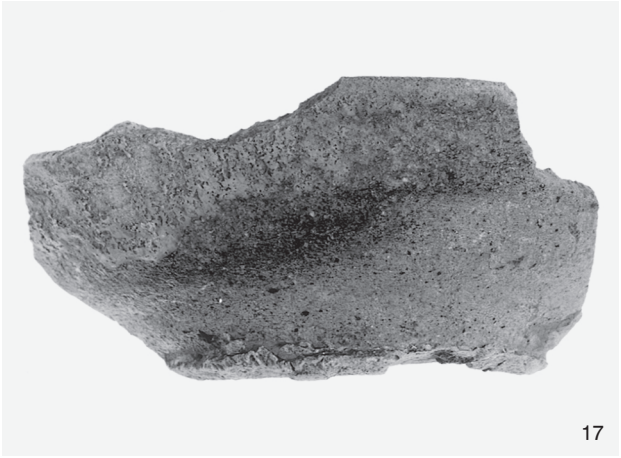
10

13

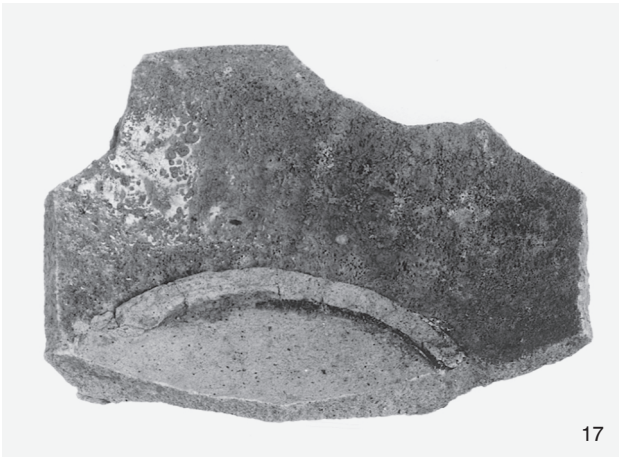
12

14

16


17

19


17

出土遺物

21

33

23

36

37

35

40

42

43

45

46

出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	まないじんじゃうらほうがんちいせきはっきつちょうさほうこく
書 名	真名井神社裏包含地発掘調査報告
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告
シリーズ番号	242
編 著 者 名	萩原義彦
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　　℡0596－52－1732
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
まないじんじゃうらほうがんち 真名井神社裏包含地	みえけんしまぐんだいおうちょうなだ 三重県志摩郡大王町名田	24522	49	34° 17′ 12″	136° 53′ 43″	20011024 ～ 20011129	370㎡	平成13年度ふるさと農道整備事業（名田地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
真名井神社裏包含地	集落跡	古墳時代		古式土師器複合口縁壺・小型丸底壺・高杯	
		鎌倉時代	掘立柱建物	陶器椀・皿（山茶椀・皿）・白磁	
		江戸時代	土坑	焙烙・煙管	

三重県埋蔵文化財調査報告 242

真名井神社裏包含地発掘調査報告

２００３年３月

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　　オリエンタル印刷